

# 地域の課題 自分たちで考える 市民100人ミーティング

我がまちの課題は自らの手で考える――。無作為に選ばれた福知山市民が地域の課題を語り合う催しが先月、同市の成美大であった。龍谷大と成美大、市などが開いた「未来を描く! 福知山100人ミーティング」。最初は緊張していた参加者も次第に打ち解けあい、積極的に発言を重ねていた。

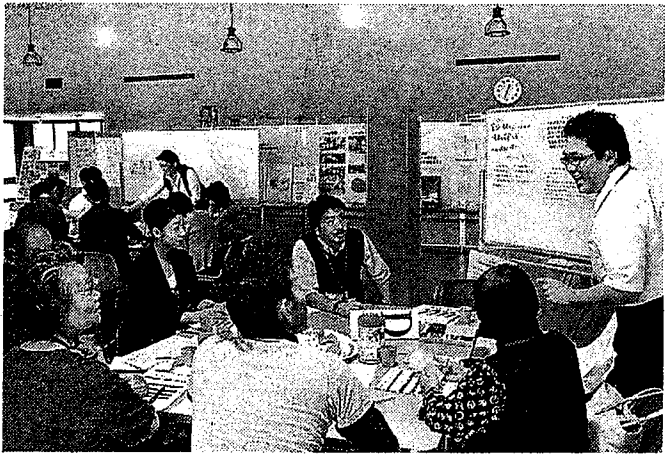
市が住民基本台帳から無作為に選んだ3550人に参加を呼びかけ、9月6～8日、希望者と事前研修を受けたファシリテーター(議論の進行役)の大学生らを加えた10～70代の100人が参加した。3組に分かれ、連日30人余りが地域の課題を語り合った。

最初に「肩書や立場を忘れる」「人の話をよく聞く」「少数意見も大事にする」といった議論の心構えの説明も受けた。

そして、各参加者が地元で自慢に思うものを自由に付箋に書き、模造紙に貼り付けた。「福知山城」「工業団地」のほか、「駅前の街路樹がきれい」「観光施設の駐車場に困らない」などの特色が並んだ。

主婦の岸本優子さん(70)は「他の人はこんなことを考えていたのかという驚きがあった面白い」。1人で10個以上書く人もおり、故郷に寄せる思いの強さを再認識した。

続いて、街の抱える課題や解決



地域の課題について自由に意見を出し合う参加者たち＝福知山市の成美大学

## 福知山 無作為抽出の10～70代が参加

策を議論。「バスの本数が少なく不便なので増やすべきだ」という主張には、「財政難のなか便数を増やすのは現実的でない」「増やしたら確実に利用客が増えるよう、住民側の努力も必要」といった意見が出た。

観光振興では「市外の若者が体験学習に來られるイベントを開く」といった意見や、「休日に福知山市民が地元にとどまるように、親子で遊べる場を設ける」といったアイデアも出た。

こうした議論の手法はドイツで始まり「市民討議会」と呼ばれる。今回の企画は福知山市民協働推進会議と市のアイデアに、大学側のノウハウを加えて実現した。

文部科学省の「大学間連携共同教育推進事業」で採択された、大学と地域の連携構築などのプログラムの一環。政策決定のプロセスに一般市民が参画するための仕組みづくりを、大学と自治体、市民が共同で実施するのが目的だ。

龍谷大政策学部の只友景士教授(47)は「様々な年代で構成する『ミニ福知山市』での議論を通じて、市民が期待する政策の方向性を示せる。取り組みを繰り返せば、漢方薬のように時間をかけながら市政改革に効果を発揮する」と話す。市民協働のまちづくりに学生が積極的に参加し、その過程を体験して学ぶことも目標の一つにしているという。

参加した成美大経営情報学部3年の阪元秀平さん(21)も「みんなが真剣にアイデアを出し合っていて刺激になった」と話した。市は、集まった意見をできるだけ市政に反映させたいという。

(佐藤剛志)